100年先を読む
最終回

# 情報社会を変質させるメタヴァースに勝機

## 見知らぬ人々が交流する情報空間

相互に見知らぬ多数の人々が自由に情報交換できるサービスを提供して巨大企業になったフェイスブックが、昨年、社名を「メタ」に変更するとともに「メタヴァース」という新規のサービスを提供すると発表した。メタは超越を意味する接辞、ヴァースは宇宙を意味するユニヴァースの後半で、両者を合成して「超越した宇宙」を意味する。これは通信回線で相互に接続された多数のコンピュータや携帯電話が共有する空間を表現し、仮想空間とも翻訳される。

人々がゴーグルを装着して端末装置からメタヴァースに接続すると、同時に接続している人々と自由に情報交換をしたり、そこでの催事に参加したり、内部に出店している仮想商店から商品を購入するなどのサービスを享受することが可能なシステムで、情報空間の内部に構築された都市と理解できる。ただし、メタヴァースという名前は1992年にアメリカのSF小説に登場しているし、初期の段階のシステムは2003年に「セカンドライフ」という名前で実現している。

このような技術が登場してきたのは、コンピュータが高速になり多数の人々が同時に参加しても処理できるようになったとともに、インターネットや携帯電話の通信回線が高速になって画像情報の利用の制約が緩和されたからである。さらに新型コロナウイルスの蔓延(まんえん)で、人間同士の直接の出会いの機会が制限され、仮想空間内部であっても見知らぬ人々と出会う機会を提供するサービスが歓迎されたことも影響し、すでにいくつかのサービスが提供され始めている。

## 既存のネット販売とは異質な環境

この連載で以前（2021年2月）紹介した「デジタル・ツイン」は現実に存在する都市や設備をコンピュータ内部にデジタル情報で構築するシステムであるが、メタヴァースは架空の環境を構築し、そこに人々が通信経由で参加する仕組みである。一例はアメリカのエピック・ゲームズが2017年から提供している「フォートナイト」であり、多数の人々が接続して戦闘ゲームなどをする情報空間で、登録人数は３億5000万人にもなり、巨大な社交空間になっている。

フェイスブックを創業したM・ザッカーバーグがめざす「メタヴァース」は物理空間に存在しない都市を構築することで、10億人程度が同時に参加できる未来を構想しているが、現在の上海や東京などの巨大都市とは桁違いの環境が情報空間に出現することになる。そこでは相互に未知の人々が出会って交流するだけではなく、商店を出店して物品を販売し、コンサートを開催し、絵画の展示会場を設営するなど、実際の都市に存在しているような活動が展開されることになる。

このような空間は商品の宣伝のためマスメディアに多額の費用を投入できない中小企業にとって絶好の機会を提供してくれる。アマゾンや楽天は商品の写真、簡単な説明、値段だけを表示して注文を待機している片側通行であるが、メタヴァースは情報空間ではあるものの、従来とは相違して対面で相手と情報交換できる空間で、アクセスしてくる人々に個別に対応することが可能な新規の販売戦略が可能になる。そこを見極めることが機会を把握する要点になる。

## 小回りのできる企業に機会

今回の新型コロナウイルスの蔓延でズームやティームズなどのテレビ会議システムの利用が急速に浸透したが、それらは事前に設定された時間に事前に指定された人々が情報交換するサービスであり、現実の商店のように、たまたま通行していた人々が商店に立ち寄るという偶然の出会いはない。しかし、メタヴァースでは世界の億人単位の人々が自由に徘徊(はいかい)する24時間都市が出現することになり、通信販売という概念とは完全に別物の流通形態が出現する。

この環境の出現の意味を検討してみる。生産の中心が狩猟から農業に移行したとき、生産空間の中心は森林から農地に移行した。工業が中心の産業革命では農地が工業用地に様変わりした。情報社会の登場により都市が社会の中心になった。これから登場するメタヴァースは実体のある都市を仮想空間が置換する。そのように理解すれば、メタヴァースは人間の活動環境の第四の巨大な転換である。小回りの利く中小企業はこの革命の主役になる十分な資格がある。

＊新創刊の『月刊 三方よし経営』では、月尾嘉男氏による連載「永続への転換戦略」がスタートします。ご期待ください。

東京大学名誉教授
月尾嘉男（つきおよしお）
*Tsukio Yoshio*

昭和17（1942）年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースキーをしながら私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組む。著書に『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本』（東京大学出版会）ほか多数。